

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	衛生の弊 : 雑録
Author(s)	柿田, 末四郎
Citation	龍南會雜誌, 87: 49-58
Issue date	1901-10-18
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5231">http://hdl.handle.net/2298/5231</a>
Right	

俳句

朝霧や川の向の人を呼ぶ	流瓢	打負けて詮なき顔や老相撲	全
團栗を拾ふ野分の朝かな	全	糲摺やランプさけたる柿の枝	全
牧場の柵に野菊の盛かな	全	砧うつ家に煙草の火を借りぬ	松村
古寺や壁一面の蔦紅葉	百日紅	糲摺の糲うつたかき蓆かな	全
野分して空一面の雲早し	芥雄	朝霧や町を離る、郵便夫	全
峰の松麓の家や霧時雨	石麓	橋の根に物賣る聲や朝の霧	全
松茸を苞にしてあり麓茶屋	双松	稻妻や祠小さき森の中	全
朝霧や漁船寄たる湊町	全		

雑録

衛生と弊

囑託衛生醫 柿田末四郎

予は嘗て本誌に於て、世人が身軀を保護に失はるの弊を述べたることありき、然るに、其弊害は今日に至るも、少しも改まるゝまなきのみならず、益甚しきを加ふるを見る、そふで、今爰に貴重なる本誌の餘白を借り、再び小言を述べ、會員諸君の一讀を煩はしたいと思ふ。

扱て衛生々々と云ふとは、近年漸く喧しくなり、一物を食ひ、一事を爲すにも、必つ衛生といふと

を考ふる様になり、或る方面から見れば、世人に衛生思想の發達した徴として喜ばれるかも知れぬが、又た或る点から見れば、口に衛生を唱ふるにも係らず、人々の身躰が漸々虚弱となり行く有様は確かなる事實である、彼の毎年各地に於て行まつ、ある徴兵検査に、少壯者の躰格が、年々歳々悪くなると云ふことは屢耳にする所であつたが、本年第一師團管下に於ては、其成績一層不良で、寸尺の足らない不合格者をも除外例として之を加へなければ、定員に満たないと云ふことである、斯る現象は我日本帝國將來の爲め、甚た憂ふ可き一大出來事で、其原因は我國勢の膨張、餘り急劇に過ぎ従ひて、生活の競争劇甚となり、爲めに運動不足、精神過勞等も大に之に關する事と思はれるが、衛生の弊と云ふ事も亦た大に國民の健康を害しつ、あると云ふ事は、確かの事と信するのである。抑も衛生と云ふ事の定義に就ては、各學者の見解多少異なるをも、最終の目的は躰軀強壯活潑で生存競争場裡に勝利を占め得る状態を云ふのに違ひはない、所が右申した通り、我國民健康の度が、年々歳々減弱すると云ふに至ては、吾人共に奮勵一番、大に國民の注意を喚起するの必要があると思ふ。

衛生は應用上、個人と公衆との二つに別れて居るが、此二者は相待つて恰も車の兩輪の如くに働き初めて効果があるのである、然るに、人々自己の身躰を大切にする事にのみ注意し、即ち個人衛生と云ふ一方にのみ着目するの結果、健康者にして常に病人の眞似を爲すと同しく、所謂鑿に倣ふの愚を爲す、言を換へて之を云へば、衛生なるものを餘り極端の些細の事に迄應用するの弊で、此弊が、吾人健康の度を減弱せしむる主要の原因と思はれる、之に反して、上水下水の設備、土地の衛生的

改良、傳染病豫防等の如き公衆衛生の發達に由りて、大に健康の度を増加すると云ふことは各國既に實例あり、此緊要なる公衆衛生に向ひての世人の注意が少きこと、恰も、曉天の星の如しとも云ふ可き有様なるに至りては、實に慨嘆の次第である。

個人衛生の重きに失したる事につき、一々實例を擧ぐるも、くどくどしければ、唯だ一二の實例に止めん、先づ藥品濫用の弊が漸く行はれ、殊に傳染病人或は健康人に於て其例が澤山ある、平生、柔軟の食物のみを以て消化し易きものと誤信し、濫りに胃腸を保護するの目的で、却て精力の衰耗を來す事、感冒を恐る、が爲め、濫りに厚着を爲し、皮膚を保護すると、蛋白質とは滋養物の異名の如く誤信し、之を含有すると多きものは濫りに之を用ゆる事など、其他、些細の事を擧げ來らば、逆も限りある誌面では述べ盡されぬ程である、所が此些細の事が、吾人の健康上に於て不知不識、大害を來しつゝ、あると云ふ事は、決して輕々看過す可らざる事であると思はれる。

個人衛生のみに注意するの結果は、亦た以上の如き注意を怠るの外、病なるものに向ひて。少しも警戒するとなく、單に恐怖するのみにて、其結果は亦た飲む可きものも飲まず、食ふ可きものも食はず、爲めに却て身體の營養不給を來すものある事は予等の日常實驗する所である、そこで「スベシセル」と云ふ衛生學者は、衛生は危険なりと云ふ、其の故如何にと云ふに、此道が開くれば吾人の周圍に群かり來る種々の危険を除くが故に、抵抗力弱き柳腰の弱者が殖へると之は取も直さず、個人衛生の弊を云ふのである「衛生なるものも斯る極端に應用せられては、効力所でない、大害である、されば予は個人衛生と云ふ事は、常に外界に對して警戒を怠らず、且つ運動欲勉強欲飲食欲

等吾人の總て欲を制するのみを以て足ると信するのである。

從來世の中に販賣しつゝ、あるあらゆる飲食品に於ても、世人衛生と云ふことに注意すると云ふ弱點に付込み、其の販賣品にも衛生、滋養、強壯、精選、無類、純良、精製等の肩書を付け、又た追ては殺菌とか、滅菌とか、或は消毒とか云ふ肩書なども付けて、表面上の信用を得るの一の手段とするのであらうと思はれる、所が幾多飲食品の内には、或は不良品や贗造品が在りて、吾人の健康を害しつゝ、あると云ふ點に注意する事が、頗る簡要なるにも係らず、世人が此等の點に向ては餘り注意せざる有様であると云ふのも、健康障害の一原因と思はれる、右列擧した肩書なども正式に學問上の檢定を経たるものならば、固より信するに足るのであるが、唯だ奸商等が手前勝手に付するのであるから、一も安心は出来ない、そこで我政府に於ても、法律第十五號、内務省令第十五號、全第四十六號、全第三十號、全第十七號、全第三十七號等の如き、其他飲食品以外の件に就ても、數多の法律上の制裁を以て、大に我公衆衛生上に警戒を與へられてある、斯る事柄に迄、一々法律上の制裁を加へらるゝと云ふことは、一般の衛生思想が幼稚なるを示す、言を換へて之を云へば、暗黒なる衛生界を照す一の燈明台として發布せられたるもので我が衛生界の爲めには實に長大息の次第である。

次に酒の事に就て一言せん、酒は我衛生上に於ては一の嗜好品に属す可きもので、吾人の生活上一日も欠く可らざる必要品ではない、然るに、酒は百藥の長とか鬱を散するとか唱へ、冠婚葬祭として酒を用ひぬと云ふことはないが、此は畢竟、古來の迷信で、餘り酒を難有過ぎるのである、殊に今日流行しつゝ、ある酒は、衛生上是非とも禁す可き必要がある、なせと云ふに、以前酒造石税二

圖の時に比すれば、今日は其七倍即ち石税拾四圓酒一升に付き拾四錢の税金が課せられてある、斯る増税の結果、全國到る所種々不良なる混成酒が大流行で、此混成酒なるものが、亦た我國民健康の度を減弱せしめつゝありて、其害毒の及ぶ所、實に想像に絶へたる次第である、所が此混成酒なるものは、如何なるものであるかと云ふに、アルコールを主成分として Hoffman、Fuchlmarlin、水揚酸、ザッカリン等、種々のもの、混合より成り、有害のフェーゼル油（メチール、ブチール、プロピール、アミールアルコホル等の總稱）を含み、之を飲用せば愉快に興奮することなく、嘔氣、嘔吐、頭痛、眩暈等を訴へ、恰も一の藥品の中毒と看做す可きもので、腦力を勞する學生などに於ては、特に禁す可き有害品である、そこで先づ社會の相續者たる各學校生徒に於て、大に禁酒の美風を養成する事は、實に刻下の急務と思はる、又此酒精飲料の害は、實に日本酒のみではない、ビール、葡萄酒等に於ても、種々の醸造品や、不良品があるより大に氣を付けなければならぬと思ふ、其外夏季の飲料たる「ラムネ」「ボンズ」蜜柑水等に於ても、屢不良品がある故に大に警戒を要するので、一口に之を云へば、斯る養護品は用ひぬと云ふ習慣を付るのが第一の安全であると思はれる。』以上申述べた衛生の弊を救済するには、如何なる策を取れば宜しいかと云ふに何にも六ヶ敷事はない、即ち上述の弊のある所を知り、此等の事物に向ひて充分に警戒を加へ、且つ眼界を廣くして大に公衆衛生が必要であると云ふことに着目すれば足るのである。

次に營養品の價值、並に本校生徒諸氏の病類に就て一言せん。

○營養品の價值、前に述べたる通り、人々が個人衛生を重んずるの傾向よりして、大に營養品の價

値に氣を付けると云ふ様になつたのは、一の進歩に違ひはないが、蛋白質を以て滋養物の異名の如く誤信するなどは、全く間違ひである、元來營養品の價值を定むるには、第一衛生學上に於て其の成分の檢定を要するとは無論、次きに生理學上に於て吸收難易の試験を遂げ、始めて其の價值を判定するのであるから、單に蛋白質に富めばとて、決して價あるものでない、尤も蛋白質なるものは、吾人身体の緊要なる一成分たるには相違ないのである、所で此の營養品中最も廣く用ひられて居るのは牛乳であるが、其の養價は「ホイド」と云ふ人の調べたのには、其の七勺半は、鶏卵一個と拾分の含脂肪と全價であると云ふことで、學問上、單に一品を以て滋養物の名稱を下さるゝものは、牛乳のみである、其證據は只だ是れのみによつて、初兒の成育するので分る、而かし大人が之れのみによつて生活せんことは一日に一升五合乃至二升を飲まなければならぬ、彼の「クルヂスタン」の民「アラビヤ」の定住なき農民などは、此の牛乳のみ用ひると云ふことである、されば、毎朝五勺の牛乳を用ひるから、元氣が付くとて、勇み立て居る人などは、餘り牛乳を有り難た過ぎるのである、つまり、充健康の人には必要の飲料ではないが、多くの病人には寸時も欠ぐべからざる必要品である、然るに此牛乳を平日用ゆる人が、朝夕食前空腹の時に用ゆると云ふことは、殆ど普通習慣の様であるが、是れは間違ひで、蛋白質の消化は含炭素より後る、のであれば食後一時間目位に用ひるのが宜しいのである。

從來牛乳の結核（珍珠疫）が人に傳染する恐れありとて、衛生家が大に警戒を與へたが、此事に關して結核菌發明者たる獨逸のユッセル博士が、本年七月廿三日英京倫敦に於ける結核會議の席上に於

て一新説を演舌して大に喝采を得たことがある、其要旨は、全氏が二ヶ年餘動物試験の結果、牛の結核は、人類の結核とは全然別種のもので、相互決して傳染すべきものにあらざると斷定した、此の新説に對しては、猶ほ二三の異議者なきにあらざれども、兎に角、有名の博士が、而かも精しく試験を遂げ、公會上に於て發表したことであるから、滅多に間違はあるまいと思ふ、此の事にして果して間違なければ、結核傳染の道が一部潰れたものとして幾分は安心されるのである。

それから二十五年間、我國に在りて能く邦人の生活、狀況を取調べた彼のベルツ博士が、當春飯國の節、伯林醫學會に於て、「植物食と仕事の平均に就きて」と題して一場の演舌を試み、大に彼國醫學社會の注意を引いた事がある、其の要旨は、日本國民は植物食にて能く幾多の勞働に耐へ又た混食にも能く慣るゝと云ふのである。

元來我國民の大部は、純粹の植物食で、一部は和洋混食、或る上流の一部にのみ洋食が行はれる有様である、所が我國に於ては、大に肉食論を主張し、或は石坂氏の如き、絶對的に、植物食論を主張するものがあるが、其の可否を斷定することは別問題として、我國民現今の生活程度より見れば、食物改良の事は、暫く措き、先づ生活上に一定の規律を設けることが、衛生上に於ける目今の急務ではあるまいかと思ふ。

○本校生徒病類表、予が多年實驗する所に由れば、其多數は呼吸器病と消化器病で、其理由は別に説明を要する迄もなく、其侵襲を蒙むる場合が多い爲め、從ひて此器官の病種が多いので、此點は別に自宅の患者と異なる事はないけれども、爰に生徒諸氏に向ひて特に注意を促す可きことは、諸氏が



休學、半途退學、死亡等の原因、病氣にあるときは、いつも肺炎加答兒、肋膜炎、神經衰弱症の三者が、多數であると云ふの一事で、此三者は、諸氏が大抱負を以て彼岸に猛進せんとする前途に横はる一大強敵で、此強敵に打勝つの勇氣がなければ、如何なる希望も水泡に属するの嘆があると思ふ、尤も此の三者が、本校特有の病氣と云ふのではない、殊に結核の如きは、最も廣く蔓延しつゝ、あるのである、然るに此の結核病の恐る可き傳染病で、大に衛生上の注意を要するとも、曩に本誌に於て述べたが、本症の傳播は全世界に其勢を逞ふするので、各國に於ても屢其撲滅會議が開かれて居るが、此疾病の社會に及ぼす害毒は、恐く急性傳染病に一步も譲らぬ位であると思はれる、所が其恐る可き傳染病であると云ふ事も、近時漸く世人に知れ亘らんとするの徴を呈して來たのは、公衆衛生上實に賀す可き事である、従ひて肺炎加兒なる病名が、肺結核の初期と云ふ事も、畧は知れ亘つて來た、願くば此等の事が、世人一般に知れ亘りて、大に警戒を嚴にする事が目下の急務と思はれる。

結核病の初期が、肺に發すると云ふ一事は、其空氣傳染たる事を証明するので、何故に肺炎より起ると云ふに肺の形ちは諸君が博物學に於て既に知らるゝ通り。略ぼ三角錐體狀で、其基底は横隔膜面に向て縮張著しく、尖頂は鎖骨上窩に達し、此部位は肺の全軀中最も安靜の位置で、通常の呼吸に於ては、殆んど擴張することがない、そこで、結核菌が此安靜なる占居地を選んで、是よりろろろ眞の肺結核に移り行くので、尤も取りのけの場合にてわ、肺の下縁より起る結核もないではないけれども、頗る罕れなのである、斯る理由よりして、常に運動不足且つ其素因を有するものなどは、

最も本症に罹り易いからして、特に警戒を要するのである。

肋膜炎は初發より結核性なることあり、或は其轉飯として十中七八迄は終りに結核を發するのである、そこで若し不幸にして本症に罹らば、次に來る可き結核と云ふ事に就て、大に警戒を要するのである、そして本症の誘因は、感最も多數を占む、殊に素因の大關係あることは固よりである。神經衰弱症、本校に於て多く見る所のは腦性で、元來本症は、官能的病に屬するので、神經性の素質を有するは固よりなれども、名譽心の挑撥、精神過勞等は、著しき誘因である、そこで生活競争の甚しき今日に於ては、漸次本症の増加する傾向あり、殊に米國に多いので、米國病なる名稱を付せし人がある、又た結核の初期に於て、本症の状態を呈し、來るものが稀れならざることであれば此點に付ては殊に注意を要すること、思ふ。

以上の三大敵に向ひ、如何なる方策を行へば之に打勝つかを述ふことは、尤も必要のことと考へらる、然るに此の目的を達するには、何も特別の注意迎はなく、勉めて身神の過勞、安逸を避け、恐怖心を去り、體育を充分にし、次て水治法を勵行する丈である。

水治法に付ても、曾て述へしことあれども、一般に勵行する勇氣のある人は余程少き様に見受けらる、の一事は實に遺憾である。

水治法は、近時漸く盛んならんとし、世人多くは其の必要を感じ、或部の人は盛んに勵行することあるので、今更其の効力及び方法を一言するは、蛇足に似たれども、念の爲め茲に一言し置くのである、

水治法の効力は(一)皮膚の寒冷刺激に依りて氣溫の變換に對する抵抗力を強盛ならしめ深呼吸に依りて肺の運動を助く(二)筋肉骨格の運動に依りて食機を亢進す(三)血行を盛んにし皮膚清潔となり精神大に爽快を感ずる等である。

方法は冷浴(殊に汲置の水にて二三分間)灌水冷濕布摩擦の三法に過ぎないが何れの法を行ふも終りに能く皮膚を摩擦することは同様である。

水治法を行ふべからざる場合は、心臟病者、勞働の直後、脚氣(心悸亢進あるもの)等で、灌水の際頭部よりするのは禁忌、殊に神經衰弱症のものに於ては決して行ふべからざるものである。

かきよせ

晩 川 生

### 文字の經濟

今の世、何ろ、冗蔓繁蕪の駄文章多き、云ふ所喟々數萬言、意のある所を問へば、則一言にして足るのみ、一寸雜誌に載するにも四五頁以下の文は載せられずとし、讀者亦文の長短を檢して、然る後に讀まむとす、ア、過れること甚しき哉、少なき資本を利用して出来る丈げ、多くの利益を收得せむとするを所謂經濟の主眼なりとせば、能ふ丈け鮮なき文字を用ゐて、能ふ丈多くの思想を現出するも亦文字の經濟に非らずや、極めて卑近なる漢文に證例すれば孟子の王霸論は九十七字、而かも議論明晰、王半山の讀孟嘗君傳は僅々五十四字、而かも千秋の絶調たるを失はず、若し夫れ、辛稼